

俳句

秋口大門
北川栄子
吉永幸司
選

特選 手の甲に看護のメモや夜の秋

西今町 松本トシ子

(評) 晩夏の夜、生死を彷徨う医療現場は忙しい。手の甲は一枚の記録として書き込まれ、看護師の慌ただしい時間は過ぎてゆく。現場の臨場感を垣間見る。

(大門)

特選 木の芽風ジャズセッションの軽やかさ

京町三丁目 林 尚子

(評) 冷たく寒い冬の季節が過ぎ、暖かい春風と共に木々の芽吹きが始まる。人の心も弾み、戸外へと眼が向けられる季節でもある。音楽もその一つであり、軽やかなジャズを聴くと身体が自然に動き、リズムを取りはじめたかのように思う。

(栄子)

特選 大琵琶にかけ橋結ぶ時雨虹

米原市 田辺仁美

(評) 琵琶湖は虹が出やすいと言われています。山に囲まれていて、にわか雨が多いからだそうです。この日も「かけ橋」のように大きな虹が出たのでしょうか。近江が誇る琵琶湖を愛する気持ちが新たに生まれたのです。

(幸司)

入選 万緑の押し上げている天守閣

高宮町 前川菅子

(評) 山城の天守閣を夏の深い緑が空に押し上げているのだ。彦根の玄宮園から見る天守閣の風情だろうか。城の森にはさまざまな鳥の声が聞こえる。

(大門)

入選 参道の鎮もる長さ杉落葉

後三条町 秋山正子

(評) 虚子の句に「杉落葉して境内の広さかな」がある。杉と言うと樹齢何百年の大樹が想像される。歴史のある神社仏閣であればあるほど、厳かさが感じられ、歩くうちに参詣の心が引き締められゆく様に感じられる。

(栄子)

入選 水入りて突如代田の宇宙めく

日夏町 林 正子

(評) 収穫の秋から冬にかけて手を入れてこなかった水田でした。気が付けば、代掻きが終わり、水が入れば田植ができるばかりになっていました。そこに、突如、水が入ったのです。今までと違う風景を「宇宙めく」とした発想が見事です。

(幸司)

入選 うなづくも言葉のひとつ日向ぼこ

西今町 前田弘子

(評) 冬の日差しは少ない。この恵みの暖かさに会話の弾む縁。しかし、その会話も日に溶けるように弛んでゆく。話を聞きながら聞く姿が浮かぶ。至福の所作である。

(大門)

入選 雨一と日木の芽静かにほぐれけり

日夏町 寺村 房子

(評) 一日ごとに進みゆく春を慈しむような雨であり、この雨からは昏さが感じられない。
手入れされた庭の木々も、しつとりと暖かい雨に促される様に芽吹きを始めたのだ。芽吹きには日差しだけでなく、雨も大切な役目を持っている。

(栄子)

入選 悴みし一日を解きし湯船かな

後三条町 北村 しげ子

(評) 朝から多忙だった一日が終わりました。ほっとする時間。それが湯船です。家の内外の仕事が何であれ、その日は手足が凍え、思うように動かなくなる位の寒さが「悴みし」です。お疲れ様と労いたい気持ちです。

(幸司)

入選 春風に吸ひ込まれゆく打球音

芹橋二丁目 秋山 栄子

(評) 冬から解放されて春になりました。甲子園の高校野球からプロ野球。あるいは大リーグまで野球への関心が高まっています。夢を追いかけて楽しむ野球少年達の鼓動の響きでしょうか。「打球音」が印象に残りました。

(幸司)

入選 靴底の泥かき落す竹の秋

大藪町 吉田 和治

(評) 竹の秋は春の季語、もう筍の芽が顔を出す時期。そんなころの竹藪は雪が解けてぬかるむ。いつのまにか靴底に泥がついて歩行を妨げる。その泥を丁寧に拭う。「春泥」という季語もあるが、十分に春の景が伝わる句となった。

(大門)

入選 憂きことのなべて包むや今日の月

東近江市 坂口 靖子

(評) 今日の月は中秋の名月。名月の静かに地上を照らす光。確かにここ鎮まる一時である。憂きことの多き世界を包むように月は私たちを心穏やかにしてくれる蕪村の「月天心」の句を想起させる句。争いや国々の戦、月は地の穏やかな気持ちを取り戻すことひたすら願い優しい光を投げかけている。「なべて包むや」に感無量の言の葉を感じる。

(大門)

入選 風薫る心膨らむ五感かな

正法寺町 金子 君子

(評) 五感は、視・聴・嗅・味・触の五つの感覚を言う。軽やかな清々しい初夏の風を、胸いっぱい吸った時の心地良さが解かる気がする。身体全体で心地良い風を味わっている様子が窺える。

(栄子)

入選 花の雲大道芸の真顔なる

芹橋二丁目 大野 ゆう子

(評) 桜花爛漫の彦根を思い浮かべた。「花の雲」は、満開の桜の花が咲きつらなあって、雲の様に見える事を言う。
大道芸にもいろいろあるが、楽しくおしゃべりしていた顔が芸を始めた途端、真剣そのものに変ったのだ。表情の機微をうまく捉えている。

(栄子)

入選 あやふやな九九の七段山笑う

東近江市 福澤 啓一

(評) 謎のような「あやふやな九九」という表現が魅力です。子供であれば、苦手な七の段が言えないこと。大人では、そろそろ物忘れが多くなつたなと思うことかもしれません。「山笑う」が作品を明るくしています。

(幸司)

佳作 鋤き込むや春の光と心意気

開出今町 西崎八重子

佳作 伊吹山晴れて湖北路風光る

地蔵町 佐古徳子

佳作 天心に城を遊ばせ月の宴えん

城町一丁目 北村天子

佳作 浮生なる相とて春の朝寝かな

稲里町 野瀬善一

佳作 八荒の波川尻を遡る

米原市 成宮義雄

佳作 川幅をぐんと広げて雪解水

中藪町 本田伸一

佳作 梢射す寒月庭に影を生む

大藪町 柳瀬宏子

佳作 春の風新生活に夢乗せて

開出今町 沢田初枝

佳作 滴りのごとくぽつりと言ふ本音

外町 知田照子



《総評》

今回の応募者は激減しました。残念です。どんな訳があるのか。よく考える必要があります。

さて、俳句はある意味長屋文学だと思えます。十七音の短詩に笑いや悲しみの人情や自然の美を拾います。

彦根には蕉門十哲の一人森川許六は彦根の藩士で多くの俳句が残されています。そのような偉大な俳人の句に学びながら私たちは優れた作品を生み出していきたくと存じます。

滋賀を取り巻く太湖、緑豊かな彦根城、北には霊峰伊吹山、東に広がる田園、句材は尽きません。さあ、みんなで紙と鉛筆を持ち、彦根の町を歩きましょう。皆様とどこかでお会いすることを楽しみにしております。

秋 口 大 門

今回は、応募の人数が減少しましたので、句数も減りました。しかし、風景を詠んだもの、日常生活の機微を詠んだもの等、内容的には充実していたように感じました。

遠くまで行かなくても詠む材料は見つけられますので、また一年間がんばって作句していただきたいと思えます。そして、一人でも多くの方が応募して下さるのを、期待しております。

北 川 栄 子

応募作品は、日常のある日、ある時を丁寧に俳句としてまとめていて印象に残るものばかりでした。作品に向かいながら、「季語の活かし方が上手いな」「この語句がいいな」等とつぶやくことが多くありました。

俳句は十七文字という約束があります。伝えたいことの全てを説明することは不可能です。言いすぎないことが大事です。

特に印象に残ったのは、想像を膨らませる手がかりになる言葉に出会えた作品です。

吉 永 幸 司

選者吟

萩月や絵図の戦に「井」の御旗

秋 口 大 門

磐座を仰ぐ裾野の草青む

北 川 栄 子

飛花落花迷わずに来て城仰ぐ

吉 永 幸 司